

平成28年7月14日
於：とやま自遊館

第189回 河川文化を語る会 講演録

「立山曼荼羅に表徴された常願寺川水系の水神信仰」



『立山曼荼羅 佐伯家本』(個人蔵、富山県[立山博物館]寄託資料)

講師 北陸大学未来創造学部准教授
福江 充 氏

○福江 皆さん、どうもご苦労さまです。ただいまご紹介にあずかりました北陸大学の福江と申します。きょうは「河川文化を語る会」という場でお話をさせていただきますが、たいへん伝統のある会のようなので、今回で189回にもなるそうです。そのなかでしっかりしたお話ができるかどうかは大変不安なんです……。と申しますのは、私は今ほどご紹介いただきましたように、川のことについては全く素人です。かといって山のことには詳しいかといわれますと、それもさほどでもないのですが。ですから今日は、川の専門家の皆様の前でどうお話ができるか大変悩んでおりますので、あまり期待をせずにしばらくの間お付き合いください。

さて、私の勤める北陸大学は金沢市にありますが、近年ではアジアの学生を多く受け入れております。特に中国人の学生には、本日この場でお話しさせていただくような講義をすることも多々あるのです。北陸大学は各国の大学と提携しておりますが、特に中国人の留学生は選抜された優秀な学生たちで、日本語については読み書きとも皆さんよくできます。おそらく将来は中国のエリートになっていく学生たちです。

さて本学には、夏休み中の日中交流事業として、中国人の学生たちが金沢に1ヵ月ほど滞在し、その間、様々な面白い講義を聴講していくといったような、そういう授業企画があるのですが、実はちょうど昨日、その講義をさせていただいたところです。それに先立ち、きょうの講演とも併せ、中国人の学生たちにいったいどんな日本文化を講義すればよいものかと考えておりました。

昨日の授業では、最初、学生たちに「地図上では、日本はどんな国に見えますか？」と質問しました。そうすると、みんな頭がいいですね。やはり、日本は「島国」であるということが、まず基本情報として頭に入っています。

「先生、日本は島国ですね」と。「そのとおりです。日本は島国です。みんなよくわかっていますね」と。次に、学生たちに日本の地図をさらに注意深く見せます。「確かに島国かもしれませんが、もっとよく見てください。海に囲まれています。緑っぽい濃い部分は、実はすべて山地・山岳地帯なんですよ」と。「へえー、日本には平野がありませんね」と。

「関東地方にこのように平野はありますよ。富山県のほうにも。石川県だとあるのかないのかわかりにくいですね」、「ああ、そうか。先生、日本は山でできているんですね」、「そのとおりです。日本の国土はほとんどが山でできていますよ。だいたい65%から70%が山地・山岳で占められていると言われていました」、「へえー、なるほど」、「ところで、この海岸線から海を撮った写真を見てください。この写真にはやっぱり海に囲まれたようなイメージがあり

ます。海の向こうは君たちの中国です。この写真の海岸線に行くと、こういうふうに太陽が沈んでいって、たいへん良い景色です」といったような話をします。

この写真の風景に見るように、日本は島国であり海に囲まれているから、何となく海の文化が強いように思われます。確かにそれはそうなんです。漁村もあって、魚もとって食べます。でも、先ほどの地図を見ていただくと、国土のほとんどは山地・山岳なんですね。内陸に入っていくと、このようにどこまでも山並みが続いています。どこまでも山、また山があります。なかには富士山のような立派な山もあります。「ああ～、先生、富士山ですね」、「これが日本で一番有名な山の富士山ですよ。でも、最近もしかしたら噴火するかもしれないと言われていて、山のどこの部分が噴火するかわからないから、このきれいな形も見納めかもしれません。皆さん、日本にいる間に富士山しっかり見ておいたらいいですよ」というようなことを言うわけです。

「日本人というのはたいへん山が好きで、みんなは何故だかわからないかもしれないけど、日本の高山の山中には神社とかお寺があって、みんな山に登ったら、そういったところに参拝してから降りて帰るのです」、「へえー、不思議ですね」、「そうなのです。山中には何で写真に写っているような祠や社殿があるのでしょうか」という話をしました。

日本にはたくさんの山があるのですが、日本の山というのは時折噴火することもあります。御嶽山みたい最近にズドンと噴火して、その際には不幸にも山に登っていた多くの方が亡くなられました。もしかすると、例えばきょう皆さんが訪れている石川県の白山だって、お隣の富山県の立山だって、先ほど言った富士山なんかでも、噴火するかもしれません。日本には火山がたくさんあるのです。こういった話を学生たちにずうっとしているわけです。「へえー、日本というのは山国なんだ」、「実はたくさん山があるんだ。なかにはこんな噴火すると恐ろしい山もあるんだ。地震も多いですよ。みんなこの写真の山がわかりますか」、「わかりません、どこの山ですか」と。「これは富山県の立山連峰とって、皆さんが今訪れている石川県のすぐお隣・富山県の東の端の方にはずうっとこんな高い山、だいたい3000mほどあって本当に高いのですが、そういうのが屏風のように立ち並んでいます」、「へえー、きれいですね。高い山が並んでいるんだ。上の方は雪がかぶっていて、すごくきれいです」。皆さん優秀な学生たちですから、こうした一連の会話をすべて日本語で行ってるんですね。もしこれが中国語だったら、私は全くコミュニケーションをとることができませんが、皆さん日本語で会話してくれるのでだいじょうぶなのです。

その時に、「今、この写真を見ると山に雪が積もっているけど、この雪が解けたらどうなる

と思いますか?」「そうですね、雪が解けると水になりますよね」、「それは当たり前ですよ。水になってどうなりますか? おそらくそれはどこか流れ出ていくでしょう」、「そうそう。だから、山に積もった雪というのは水になって、おそらく低いところに流れ出て、そのあと川になるんじゃないですかね。富山には、そう考えるとけっこう大きな川がたくさんあります。常願寺川だとか、何とか川とか」と。中国の学生たちに川の名前を具体的に言ってもわからないでしょうけど。でも「そうか、山に積もった雪というのは、解けて水になって川になって流れていくんですね」、「どこに流れていきますか?」、「それは島国だから海に流れるに決まっています」。そういう話をどんどんしていきます。

最初にご紹介いただきましたように、実は私はこれまで立山に関する山岳信仰をずっと研究してきました。ですから、川の話は正直言って全く知りませんが、ただ、山岳信仰を研究していると、おのずからそういったことで川につながってきます。海にもつながってきます。いわゆる山岳信仰研究の分野では、山というのが何かというと、ひとつは水の源なわけです。山はたくさんの水を抱えています。それが低いところに流れていくのです。

例えば、雨の水だとか、あるいは雪が積もってその解けた水だとか、いろんな水が低いところに流れていき、さらに川となって海に流れていきます。だから、山を水の貯水池だというふうに考えます。もちろん現代の若者にこんな話をしても、最初のうちはそんな感覚はほとんどありません。今の若い学生たちはみんな、水というのは蛇口をひねるとジャージャー出てくるものだと思っています。私の小さな頃は、さすがに川の水ではなかったですが、まだ家の隣に井戸があって、その水を日常生活で使ったりしていました。今は上水道・下水道が完備され、井戸はなくなってしまいました。ですから、こんなことを言っている私自身も蛇口をひねって水をいただいているのですが。しかし実際に水というのは、例えば山から流れ出た川の水を、ある程度、貯水池とか大きなダムをつくって貯めて、その水を水道に利用しているようです。ということでは、私たちはいまだに山の水の恩恵にあずかっているんじゃないかと思うわけです。昔の人は、それがもっと切実でした。山中から流れ出た川の水を直接的にたくさん利用していましたから。

だから、この立山もそうだったのですが、山の中にはきっと水をくれる何かがいる。それは実は山の中に水をくれる神様がいてというふうに昔の人は考えました。神様が水をくれる。山の中に神様がいて、山の麓のほうですと、山に降り注いだ雨とか雪解け水が山の地下にしみ込んで、それが湧き出てくるとか、あるいは平野のほうですと川になって流れてきたものを利用します。その水は、山の中に神様がいて、その神様が私たちに供給してくれていると

いうわけです。

あるとき神様が怒り出すと、日照りが続いて水をくれないとか、あるいは人々が何か悪い行いをすると、やはり神様が怒って大雨を降らせ、川の水を氾濫させたりもします。実は私たちの水というのは、神様が支配しているのだという考えが、古くから富山だけではなくて日本全国にあったわけです。そういった山が水の源であり、そしてその水を供給してくれる神様が山にいるという考えがあったということを、まず一つ皆さんに知っていただきまして、次は私の得意な山岳信仰の、立山信仰のお話です。

パワーポイントのこの写真は立山の地獄谷の景色です。この地獄谷、昔は遊歩道があったところを歩いて行って、いろんな地獄の風景を見ることができたんですけども、残念ながら今は有毒ガスがひどく、とても危ないところになったらしくて、みくりが池温泉のあたりぐらいまでしか行けないんですね。昔、私はよく地獄谷の石仏調査なんかをやっていたまして、環境庁と営林署の許可のもと、腕章をつけて石仏を探して、いろいろ自由自在に歩き回ったことがあります。しかし、今となってはそんなこともできないようになりました。

今度は宗教の話なんですけれども、昔——昔といたしまして例えば古代、もしかすると縄文時代の人たちもそうだったと思いますが、皆さんは人が死ぬとどうなると思われませんか。死んだことないからわからないとおっしゃる方もいますが。宗教学の授業などで、学生たちに「君たち万が一死んだらどうなると思いませんか」と聞くと、大体は3つに分かれます。1つ目は、「そうですね先生、死んだら天国に行きますよ」と言う学生たち。「天国」ということは「天」だから、上のほうのどこかに行くと考える学生たちですね。

2つ目は、「死んだら、先生、生まれ変わるんじゃないんですか。今は人間だけでも、もしかしたら、また来世も人間かもしれない」、「私はもしかしたら、前世はフランス人の高貴なお姫様だったかもしれない」とか、みんな勝手なことを言うんですけども。あるいは中には、「いや先生、もしかしたら僕は悪いことしたから、今度はカエルか何かになっちゃうかもしれない」と。要するに、輪廻転生で生まれ変わるというふうに考える学生たちです。

3つ目は、「先生、死んだら何もないんじゃないですか。人間は死んだら無になりますよ」と考える学生たちです。いずれにしろ、どれかなんですね。

要するに、よさそうなところ、悪そうなところに、いわゆる別の世界に移動すると考える学生と、輪廻転生で生死を繰り返すという考え方の学生と、人間、死んでしまったら何もなくなる、無になると考える学生たちがいるわけです。

いろんな考え方がありますから、いずれも正解だと思うんですけども、昔の日本人はど

のように考えていたのでしょう。その考え方というのはこういうことです。

人の中に魂が入っていて、人が死んだら、その魂が死者の体からポコッと抜け出るんだそうです。しかし、その魂というのは、最初はすごく荒ぶった状態で、荒魂（あらみたま）というのですが、「まだ私は死んでいないよ。みんなと離れたくないよ」と言って、駄々っ子のように地団駄を踏んで暴れたりもします。しょうがないので、遺族は「困ったな」と思いながら概念的に結界を設けて、一時的に死者の魂を封じ込めます。例えば相撲の土俵にも結界がありますよね。土俵の上の四方に結界として柱がぶら下がっているのがそれです。土俵は神聖な場所ですから、その聖なる場所と俗なる場所を切り分けるために、土俵の上の四方に常に結界を示す柱がぶら下がってます。

話をもとに戻しますと、遺族は結界を設けて、そこに死んだ人の魂をしばらく放置しておきます。そうすると、荒ぶり、むずかる魂もだんだん落ち着いてきて、「ああ、私はもう死んでしまったんだな。しょうがないな。じゃあ、さようなら」という気持ちになります。そのあとどうなるかという、死者の魂は結界を出てだんだん高いところに上って行きます。最初はどこかその辺の丘だったのが、次第に高くなっていきます。そして最後は、さしずめ越中国ならば立山が人々に知られた一番高い山ですから、死者の魂はそこに向かってどんどん上って行きます。死者の魂は山に入ると、山が持つ様々な不思議な力や、あるいは遺族が死者のために供養を行うと、山中で死者の魂が浄化されていって、最終的には山中で「神」様になるわけです。昔の人々はこのように考えていました。昔の人々には、山の神様というのは、もともとは自分たちのご先祖様の魂だという考えがあったわけです。

ですから、その山の神様が子孫のために「おまえたち頑張って田植えをなささいよ」といって水を恵んでくれたり、「おまえたちは最近、何かと奢っているんじゃないか」といって、戒めのために洪水を起こしてみせたりもする。水の問題だけではなくて、例えば山中には人が入って狩りをします。山の神様は、「よし、おまえたちは頑張っているから、今年は熊をたくさん恵んでやろう」といって熊を出してくれます。「いや、鹿もいいだろう」といって鹿も出してくれます。このように、ご先祖様の魂がもとである山の神様が、残してきた子孫のために水や動物、山菜などいろんな山の恵みを供給してくれる。しかしその一方、何らかのことで山の神様を怒らせてしまうと大変な災いにもなります。山の神はもともとご先祖様の魂であり、そして山麓や平野の子孫たちと一緒に存在しているのです。

例えば、皆さん祭りは神様とともにありますよね。祭りには、例えば夏祭りは祇園祭などもそうですが厄災除けの祭りが多く、それこそ各季節にいろんな祭りがありますよね。

では、どの季節に多く行われると思いますか。一般的には春とか秋ですね。

春祭りというのは、ご先祖様の魂から神になった、いわゆる山の神様が、「平野に住む子孫たちが上手く田植えをしているかどうか」と、心配になって見に来ることで成立します。

山の神様は大変お節介ですから、「子孫の人々は上手く田植えをしているだろうか。じゃあ、ちょっと下りて見てこよう」といって山の神様が山から下りて来ます。そこで平野の村人たちは「今年もまた山の神様が、山から下りて見に来られるぞ。じゃあ、みんなで盛大にお祝い、おもてなしをして差し上げよう」といって、山の神様を迎えて行るのが春の祭りです。

「ああ、子孫はみんな上手くやっているな。田植えも上手くいっているな。じゃあ、みんなこのあとも頑張るね」といって、祭りが終わると山の神様はまた山に帰って行かれます。

秋になると山の神様は、「子孫たちは、上手く収穫ができたかな」と心配になって、お節介ですから、また山から下りてくるわけです。それをみんな分かっている、その山の神様を秋にお祭りするのが秋祭りです。春の祭りと秋の祭りというのは、山の神様を迎えて、お祝い、おもてなしをして、満足してもらって帰っていただく、そういう祭りなんです。

ここで、これまでの話を今一度整理しておきますと、山の神様は私たちのご先祖様です。ですから、私たちのことを気にかけています。私たちの水にかかわる生活には、ご先祖様である山の神様がかかわっています。そのかかわり方は、「川」というものを介して人々とかかわります。山および山の神様と、平野および平野に住む人々は、水の供給といったことで「川」を介して結ばれています。こうした環境が、日本人の古くからの稲作社会における宗教的・生活的な環境だったわけです。

ところで、皆さんの中には日本史が好きな方、古代史が好きな方も多くおられると思いますが、古代に、わが国にはひとつ難しい問題が出たわけです。それは「カミ」と「仏」の問題です。次に、それについて少しお話ししたいと思います。

さて、日本は島国ですから、もともと日本人独自の宗教観みたいなものがあつたはずですが、それはおそらくアミニズムみたいなところから始まったんじゃないかと思います。

日本の国土はほとんど山地・山岳でできています。白水智さんという研究者は、今のように平野に多くの日本人が下りて生活するようになったのは、おそらく江戸時代に入ってからで、もともとは、日本人の多くは山中とか山麓のところにたくさん住んでいたのではないかと、それが次第に平野へと下りてきたんじゃないか、ということをおっしゃっています。

山中や山麓だけではなく、もともと海の近くで生活していた人々もいたでしょう。ですが、いずれにしろ、今ほど平野に人口が集中しているといったことはなかったでしょう。今より

は山中や山麓線のエリアにたくさんの日本人が住んでいましたはずです。そうしますと、日本人の感覚としては、山中・山麓線のエリアは様々な動物たちとの共生エリアであり、また様々な植物なども存在して、簡単にいうと「森」の感覚なんですね。森の中に自分たち人間は、多くの生命体とともに共生しているといった考え方です。「森」というものを介しているような生命体と共生できる人間、共生する人間という感じなんですね。

なおかつ、日本人の感覚では、いろんなところに神が存在していると考えていました。森の木々や、岩や石ころに神が依りついたり、ときには動物自体が神だったり。

しかし、皆さんの中でどなたか神様を見たことがある人いますか。「私は神を見た」という人はいますか。神様を方便として形にしたものを見たことがある方はたくさんおられると思います。と言いますのは、神様が形になるときは大体、人間の姿をして絵に描かれたり、あるいは人間の姿をして木や金銅などでつくられたりしました。要するに、神様というのは形になるときは擬人化してつくられることが多いわけですが、もともと神様というのは色や形、臭いとかいうものはないんですね。目に見えない。だから、空気みたいなものです。

皆さんには空気は見えますか。私には空気は見えません。皆さんは空気が読めますか。時折、場面によって空気を読みなさいと言う人がいます。私は空気を読むのが苦手です。さて、空気というのは読むことはできても目にはすることはできない。でも、空気がないと私たちは死んでしまいます。神様も空気みたいなもので、目には見えないものですが、人間にはなくてはならない大切なものでした。それを人間がみんな共通認識をもってわかりやすく祀るために、あえて無理矢理形にしようとする、絵に描いて人間の形をさせたりするわけです。例えば、大国主命（おおくにぬしのみこと）だとか、いろんな日本の神話に登場する、皆さんがイメージをお持ちのあまのこが格好ですね。神は風とか空気のようにあつという間に、あちらに依りついたかと思うとこちらに依りついて、こちらに依りついたかと思うと向こうに依りついて、これが神の特徴です。非常に移動的、そして精神的なものでもあります。

一方、今度は仏教のお話をします。日本人は6世紀に朝鮮半島の百済から仏教というものをもらいました。いわゆる仏教の日本への公伝は538年といわれていますが、それはあくまでも公伝です。百済の聖明王（せいめいおう）という王様から、いろんな仏教の経典だとか仏像だとかを日本の天皇がいただいたんです。その際、当然ながら日本人には仏教のことをよく知る人はいないので、向こうの僧侶と一緒に経典等がやって来ました。

最初の間は、「仏教っていったいどんな教えなんだ。この経典っていったいどう読めばいいんだ。この文字は何というのだろう」などと言いながら、一緒に来てくれた朝鮮半島の僧侶

に教えてもらいながら勉強していました。仏教を信仰するというよりも、信仰対象の仏教を知ろうと、むしろ勉強・研究をしていたんです。そのあともずっと。おそらく、仏教に対する勉強や研究は、奈良時代の東大寺や興福寺など南都六宗の寺院などで行われていきます。いわゆる外国から一方的にもらうことになった仏教の思想というものを、日本人が信仰しようとするにあたって、まずはそれを一生懸命勉強して、何とか理解しようとしたわけです。

平安時代に入ると、仏教を大陸から一方的にもらうだけではなく、逆に最澄や空海のように、遣唐使として大陸に積極的に求めに人々も出てきます。その後、鎌倉時代になると、法然や親鸞や日蓮や、いわゆる鎌倉仏教のいろんな祖師たちには独自性が出ていますけれども、しかし最初に仏教をもらってからかなり長い間は勉強してたわけです。

そうすると、仏教が日本に入ってきたときに日本人が感じたことは、仏教というのは非常に理屈っぽいものだという事です。インドでお釈迦さんが仏教の悟りを開きました。その悟りの世界を、最初お釈迦さんは言葉で優秀なお弟子さんにたち伝えていかれました。そうすると、お弟子さんたちはお釈迦さんの言ったことを、「確かあのときにお釈迦さんは、ああ言っておられたぞ、こう言っておられたぞ」と、優秀なお弟子さんたちが集まって、それでお釈迦さんのお話をまとめたわけです。でも、お弟子さんたちは「お釈迦さんの話をいつか忘れてしまうかもしれない」と思ったので、それを文字に残しました。

それが、例えばお経とかになっていくわけです。お経ができると、今度はお経の解釈論が出てきたりしました。このように仏教というのは文字情報でどんどんどんどんテキスト化されて、インドから西アジア、それから中国や朝鮮、日本と広まっていきました。極端なことを言うと、仏教はけっこう文字文化なんですね。まあ、例外として仏教の中でも密教といって空海が中国から持ってきたのは、ちょっと違うところもありますけれども、でもたいがいは文字文化です。

仏教思想を記した文字のいろんなテキストが日本にどんどん入ってきて、仏教がだんだん日本の僧侶によって勉強・研究されていくと、そうすると、ひとつ困ったことが出てきました。

今の皆さんの感覚では、死んだらどこに行くと考えておられますか。先ほどの学生の話じゃありませんが、私たちは死んだらどこに行くのでしょうか。

きょうの聴講者の皆さんは比較的高い年代層ですが、この中で死んだら天国に行くと思う方は、ちょっと手を挙げていただけますか。あるいは死んだら浄土に行くと思う方は。

本日はさすがに年配の方が多いですね。キリスト教やイスラム教みたいに、「天国」じゃな

くて、仏教の「浄土」で手が挙がるのは日本人的です。

では、死んだら無になるという方はいますか。ああ、さすが現代ですね。そこそこおられますね。では、死んだらまた人間に生まれ変わって、今度はもっと美人になるわよという方。おや、輪廻転生を考える方は意外に少ないですね。

話を戻しますが、日本の僧侶は仏教に出会って、たいへん困ったことがおこりました。仏教の中では、インドの『俱舎論（くしゃろん）』とか『大毘婆沙論（だいびばしゃろん）』という書籍に地獄のことが書いてあります。皆さん、地獄ってどこにあると思いますか。行ったことがないから、わからないかもしれませんが、もしかしたらこれから行かなければならない方もおられるかもしれませんが、一般的には地獄というのは下なんですね。だって、「地の獄」と書かれるぐらいですから。これに対して天国というのは上にあります。天国に対して地獄。

一般的には当たり前ですけれども、東洋人も西洋人も、尊いものとか聖なるもの、大事なものは高いところに置きます。そうですね、それを見上げて拝むわけです。これに対して、だめなものとか、卑しいものとか、どうでもいいようなものは下に置きます。だから、悪いようなものは下の方に行き、いいようなものは上の方に行くという観念が、これは東洋でも西洋でも共通していることだと思います。

インドの『俱舎論』には、地獄の世界が地面の下の深いところに、高層マンションを逆さまにしたように上から下に向かって多層的に延びているような構造が、インドの仏教の中で地獄の場所なんです。場所も広さも決まっていて、地表から近いところはまだ罪が軽い。罪が重いほど地下の深くに行くわけでして、刑罰を受ける時間も下に行くほど長くなります。このように、仏教では生前悪い行いをした亡者が、墮とされて罰せられるのが地獄で、下の方にあると考えられていました。ですから、この仏教が日本に入ってきたとき、日本人は大変困ったわけです。

先ほどから何度もお話ししてきましたが、日本人にとって死んだ人の世界はどこにありましたか。それは山中にあったわけですね。そうしますと、「あれっ、私たちにとっての死者の世界は山中だったはずだぞ。ご先祖様がそこにおられる。でも、今度外国から入ってきた仏教では死者の世界は地下にあるそうだけど、これは困ったな。どうしようどうしよう。地獄の場所はどこにすればいいのかな」といって日本人は悩んだわけです。そうしますと、幸か不幸か日本というのは火山がたくさんある国で、各地の山中からシュシュシュと火山ガスやグツグツとお湯が出たりしています。立山の地獄谷や、あるいは恐山もそうですが、

各地の山の中に火山活動が見られ、有毒ガスや熱いお湯、ときには火まで噴いているような山というのが結構たくさんあったわけです。「なんだ、山中は死者の世界だけど、よく見ると仏教の説く地獄みたいなどころがあるじゃないか。立山はその最たるところで、あそこはまさに地獄だよ」という、そういうイメージがどんどん広まったわけです。

皆さんは「それは本当なんだろうか。誰がそんなことを考えていたのですか」という方がたくさんおられると思いますが、ひとつは、平安時代中期に法華經の靈驗についてまとめた『大日本国法華經験記（だいにっぽんこくほけきょうげんき）』という比叡山の僧侶である鎮源（ちんげん）の著書があります。例えばその本だとか、それから、平安時代の後期に『今昔物語集』とって、インドと中国、日本のいろんな仏教説話を集めた説話集があります。その中に立山の地獄のお話が出てきます。

ですから、おそらく平安時代とは言わず、もう奈良時代から一般的に日本人の間に広まっていた情報だと思うのですが、「日本国の人々が罪を犯したら、みんな、立山の地獄に墮ちるんだよ」と。要するに、それくらいに立山山中の地獄は、都の僧侶や貴族たちの間で知られていたようです。山中に地獄の世界が存在する。そのように日本人というのは、仏教を受容したけれども、仏教の内容の解釈に躍起になっていて、自分たちのオリジナルの考えが出せないでいた間は、「山中に地獄がある」という発想をずうっと持ち続けていました。

そのうちに、だんだん自分たちで經典などが理解できるようになってくると、「あれあれ、おいおい、インドの經典などでは地獄というのは下の方にあることになっているぞ。そうか、地獄というのはそうなんだな」と。要するに、よく勉強をする僧侶や貴族たちの間で、經典の中身が理解できるようになると、いわゆる仏教の考え方で地獄を規定していくことが起こり、一方、庶民の間では、やっぱり古くからの山中他界観に基づく地獄が強く残っていて、この二つの地獄は併走していくわけです。日本人の間で、ずうっと両方の考え方が持ち続けられていく。どちらかができたからどちらかがなくなるんじゃないくて、併走していくわけです。

立山のそういった地獄の文化がいつまで続くかというところ、おそらく明治ぐらいまでは続いたと思われまふ。今は立山という言葉で何を思い出すかといいますと、大概の人は「いやあ、ライチョウがいるよね」とか、「雪も多いんだよね。アルペンルートの雪の壁は凄いな。」とか、「高山植物がきれいだね」などとおっしゃられる方はいまして、「立山といえば地獄だよ」という人は誰もいません。もしいたとしても、「あなた、頭がおかしいんじゃないの」となります。でも、立山といえば確実に江戸時代までは地獄がある山で、そこに行くと死んだ

人に会える山だったのです。

江戸時代の文化文政期に活躍した著名な戯作者の十返舎一九などは、立山および立山地獄をモチーフにして大変おもしろい話をつくっています。十返舎一九自身は、立山地獄について「そんなの、うそに決まっているだろう」というふうに思っていて、だからそれをパロディ化した話を創作するのですが、どうも江戸時代の後半にもなると、長らく日本では常識とされていた「立山地獄」も、人々にはだんだん信じられなくなっていたわけです。その背景には、立山登山の実態が、信仰を主な目的にしたものから観光遊樂を目的にしたものへと大きく変わっていったということもありました。

十返舎一九は立山地獄を題材として『金草鞋（かねのわらじ）』という草草紙を書いています。その内容はパロディといえるものです。ある男にとっても綺麗な妻がいましたが、残念なことに、その妻が亡くなってしまったんですね。「ああ～悲しい。ああ～残念。とても良い妻だったのに。とても恋しい。いったいどこに行けば妻に会えるだろうか。そういえば立山に行けば死んだ人に会えると言われてるな」と思って、それで「じゃ、立山に行こう」ということで、越中国の立山へ向かいます。男は立山の地獄谷で一生懸命、自分の妻を探すわけです。「おーい、どこにいるんだ。どこにいるんだ。おれが来たぞ」。そうすると、遠くから妻が申し訳なような顔をして出てきて、「あなた、わざわざ来なくてもよかったのに」、「何で、おれがせっかく来たのに」と。「だって、地獄には良い男がたくさんいて、このイケメンの彼と私は最近うまくいってるのよ。だから、あなたもう帰ってよ」と言われて、男が泣く泣く帰ったというお話。こうした話が十返舎一九の『金草鞋』にあるわけです。

あるいは、話の内容が変わりまして、妻に先立たれた男が、立山地獄へ妻に会いに行くわけですが、この男は日頃から家で酒ばかり飲んでいました。それも近くの酒屋さんから山ほど借金をして酒を飲んでいました。ところが、ありがたいことに、最近、借金先の酒屋の親父がコロリと死んでくれました。「しめしめ、これで借金を踏み倒したぞ」と思っていたわけです。さて、男は立山の地獄谷へ妻に会いに行ったわけですが、探しても探しても妻はちっとも出てこず、そのうちうろろしていたら、死んだ酒屋の親父が出てきて追いかけて回されて、親父が言うには、「借金返せ。金が必要なんだ。おれは閻魔様（えんまさま）にお金を出して娑婆（しゃば）に戻ろうと思うんだけど、おまえの借金をそのお金に当てたいから早く返せ」といって追いかけられたという話です。

さて、こんな話ばかりしていますと、あっという間に時間が過ぎてしまいますので、話を本筋に戻さないといけないのですが、あと30分ぐらいありますから十分できると思うので

すが、立山というのはそういう意味では地獄のある山として大変知られていました。それとともに、立山には浄土山（じょうどさん）というところもありますね。

参考までに、このパワーポイントの写真を見てください。これが先ほどお話ししました『今昔物語集』で、昔より伝え言うように「日本国の人 罪をつくりて 多くこの立山の地獄に墜つ」という、平安時代末期にはこの話の内容は日本人の常識だったんですね。「罪をつくと、みんな立山の地獄に落ちるんだよ」と。しかし、地獄の怖さばかり説いていたら、人々はみんな嫌になってきますよね。これだけでは救済がありません。だから、日本人というのは大変優柔不断なんですけれども、立山に地獄があるけれども、そこには極楽浄土もあるんだよと。どこにあるのかというと、立山連峰の浄土山のあたり、だから浄土山なんですね。この辺ではブロッケン現象がよく起こりますが、昔の人はそのブロッケン現象の意味がよくわからないんですね。山をどんどん登っていくと、「あれっ、何か動いているぞ。あれっ、何か空中に浮かんでいるぞ。自分が手を振ると向こうも手を振っている。『おーい』と言うと何となく『おーい』と返ってくる」。それを、どうやら昔の人は阿弥陀様だと思ったんですね。「おお、阿弥陀様が顕れたぞ」みたいな。そして、こうした話を聞いて、「靈験のある山にぜひ登りたい」と思って立山にやってくる人もいるわけです。

ところで、日本に仏教が入ってきて、さらに展開していくなかで、当初は地獄に関する思想が浸透していきましたが、その後ずいぶん遅れて平安時代以降、浄土教思想といって、皆さんもご存じのように「南無阿弥陀仏」と称え、阿弥陀如来の西方極楽浄土に行くことを願うといった思想が伝播し、浸透していきました。もちろん、先ほど浄土山のことをお話ししたとおり、立山においてもそういった流れであり、最初は仏教の地獄の思想が流入し、その後、浄土教が流入しています。

したがって、立山山中には、のちに悪い場所としては地獄の世界である地獄谷、良い場所としては浄土の世界である浄土山や五色ヶ原といったように、悪所と良所が併存していました。

立山にも開山伝説がありますが、その話はこの立山山中の地獄・浄土と深く関わっていません。立山は阿弥陀如来の靈験が行き届いた山で、その山中には地獄・浄土があり、人々が仏教世界を体感し、修行するには最も適した場所でした。しかし、残念ながらそうした場所であることを全く誰も知らないわけです。それを残念に思った阿弥陀如来が熊に変身して、佐伯有頼（さえきのありより）という少年を立山に導き、山中の玉殿窟（たまどののいわや）という洞窟の前で、この立山を仏教の山として開くように、すなわち開山するように命じま

した。こうして立山は佐伯有頼に開山されて以降、今日まで霊山として綿々と続いているわけです。

ほんの少し立山信仰のさわりとでもいえるようなことをお話しさせていただきましたが、さて、これからがきょうの本筋で、申し訳ないんですけども、ここからがようやく河川文化のお話です。

パワーポイントの写真を見ていただきますと、立山の山の方からこのように常願寺川が流れてきます。実はきょう、私が富山県〔立山博物館〕に勤めておりました頃、私の上司で学芸課長であった菊川茂先生もみえておられまして、河川のこととか、あんまり自然科学系の内容をお話しするのは、いささかはばかられて、叱られそうなんですけど、実は厳密には常願寺川は真川・湯川・称名川がどこそこで合流して、こうなんだといわれそうですが、この場では一応立山の方から流れてきているという、雑ばくな説明で勘弁していただきたいのです。

パワーポイントの図は、先般『河川文化』という会報誌（日本河川協会発行）に投稿させていただいたときに、その際事務局さんの方でつくっていただいた図です。

ちょっとわかりづらいかもしれませんが、常願寺川の流域図としていろんな常願寺川の水系を表現したものです。

さて、今回の講演では特に、常願寺川水系における水神信仰を立山曼荼羅の中に見ていくということを主題にしています。ですから、まずは立山曼荼羅について知っていただく必要があるわけです。

立山曼荼羅は、近年の研究では、これはどうもつくられたのは江戸時代に入ってからだというふうに考えられています。パワーポイントの立山曼荼羅の写真で確認しますと、1幅、2幅、3幅、4幅の掛け軸になっていまして、それを合わせて、このように一つの画面をつくります。大きなものですと、大体縦が180cm、横が200cmを超えるようなものもあります。

この立山曼荼羅というのは、立山信仰を全国に布教していた、あるいは立山信仰を加賀藩領内で布教していた芦峯寺（あしくらじ）や岩峯寺（いわくらじ）という、現在は富山県中新川郡立山町の村になっていますが、そこにはかつて宿坊が立ち並んでまして、宿坊の衆徒（しゅうと）、すなわち僧侶や神主たちなのですが、彼らによって用いられていました。

特に越中国内では、冬の間は雪がたくさん降って思うように宗教活動ができません。そこで冬の間、例えば芦峯寺の宿坊の衆徒、衆徒というのはいわゆる僧侶たちなのですが、彼らはこの立山曼荼羅を携えて、さらに霊験のこもったお札やいろいろな立山信仰グッズを持参して、ある衆徒は江戸に、ある衆徒は尾張に、ある衆徒は信濃にといったように、日本各地

へ出かけ、立山信仰の布教をしながら、ある種、出稼ぎのように勧進活動を行っていました。これが江戸時代の立山信仰の特徴のひとつでもあります。

立山に一度も来たことがない人や、立山に対するイメージがない人のために、衆徒は立山信仰の内容が凝集して、しかもわかりやすく描かれた立山曼荼羅を絵解きして、布教していました。「立山というのはこんな山で、地獄谷というところがあって、ここは恐ろしいところで、でも死んだ人に会いたいと思ったら来てみてください。浄土山というのはすばらしい極楽浄土の山です」、そういったようなことを立山曼荼羅の絵を見せて人々に具体的なイメージを与えながら布教していました。

パワーポイントの写真は、芦峯寺の衆徒が用いていた立山曼荼羅です。画面には、芦峯寺村の様子がこれだけたくさん描かれています。

明治5年（1872）まで立山は女人禁制でした。ですから、女性は立山に登ってはいけなかったんですね。こうした場所は現在でもありますね。女性が立ち入っていけない場所には、例えば先ほどお話しした土俵の上があります。それから山岳信仰の霊場では、奈良県の大峰山（おおみねさん）の山上が岳（さんじょうがたけ）や岡山の後山（うしろやま）が入れません。これ以外にも女人禁制の場所は存在します。

立山では、明治5年（1872）に女人禁制が解かれ、女性は登山をすることができるようになりますが、それまでは入山することができませんでした。そうしますと、女性は立山禪定登山ができないことになりますから、立山信仰の救済から洩れることになります。じゃあ、立山信仰には女性救済の要素がないのかといいますと、いやいや、これがまた大変上手にやっています。やっていたのは、芦峯寺の衆徒たちですが。

芦峯寺では毎年秋の彼岸の中日に、衆徒たちの主催で、布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）と呼ばれる女人救済の特別な行事を行っていました。富山県出身の皆さんなら、もしかしたら布橋灌頂会の呼称ぐらいい聞いたことがあるかもしれませんが、この行事の内容や意義を少しお話ししたいと思います。それをお話するに当たって、まず、江戸時代、あるいはそれ以前・以降もそうですが、人々はいったい何のために立山に登ったのかということをご説明しなければなりません。

芦峯寺に姥谷川（うばだにがわ）という川が流れています。この川は常願寺川に注ぐわけですが、川下に布橋（ぬのばし）という名前の橋がかけられていました。かつては、立山禪定道は一本しかなくて、その道の途中に布橋があったわけです。すなわち、布橋を渡って行かないと立山に入っていけなかったのです。

ところで、この布橋はとても面白い橋で、芦峯寺村の中で、布橋の手前までは人間のこの世の世界で、この橋を渡った向こう側は死者のあの世の世界として観念づけされていました。ですから、芦峯寺で布橋を渡って立山山中に向かって進んでいくと、布橋から先は、もう全部死者の世界なんですね。立山に登る人は、男性の人は布橋を渡った瞬間に擬似的に死者になります。死んだ人になるわけです。現在のようにバスやケーブルなどの乗り物はありませんから、全て徒歩で苦しい思いをしながら登って行きました。「ああ暑いなあ〜。水が飲みたいなあ〜。苦しいなあ〜」なんて思いながら、一生懸命登って行きました。

そこには、実はこんな意味があります。人間は日頃からいろいろな罪や穢れ（けがれ）をつくり、蓄積していますから、それらを、いわゆる死者の世界であるところの立山山中に入って、だんだんだんだん無くしていくわけです。いわゆる、本来なら我々は死後に、生前の罪の報いで食物が食べられない餓鬼道（がきどう）の苦しみだとか、様々な厳しい刑罰を受ける地獄の苦しみだとかを受けるわけですが、実際にそういう死後の世界を、地獄・浄土が存在する立山のフィールドで、生きながらにして体験してくるということです。登山の苦しさを、いわゆる地獄世界や餓鬼世界の苦しみにたとえているのですね。それらをしっかり生前学習をしておく。悪い人ほどしっかり苦しんで立山登山をしてくれば、その人の罪や穢れが薄れ、あるいはなくなる。はあはあと言いながら室堂（むろどう）まで行って、あともうちょっとだといって雄山の山上までたどり着いた頃には、おそらくその人はかなり清らかな身になっているはずです。それまでの人生で大分悪いことをし続けてきましたから、だから仏さんや神様を拜んでお願いします。頂上から室堂まで戻ってきて、それでも自分の罪が深く、「俺はまだまだだめかもしれない。とても救われたい」と思う人は、次の日朝早くから地獄谷をしっかりと回ってくれば、おそらく大体の罪は無くなっていきます。それで立山から降りてきて布橋まで戻って来ますと、その人は新たな生命・人格に再生して、すなわち生まれ清まって人間世界に戻ってきたことになるのです。そうしておく、その人が本当に死んだときには、罪が無くなっているか、あるいは少ないから、必ず仏の阿弥陀如来が迎えに来てくださって、来世の極楽浄土に連れて行ってくださるだろうといった考え方です。

さて、皆さんの顔を見させていただきますと、1回の禅定登山でだめなら2回でも3回でも登らなければならないような方も見受けられます。衆徒たちはしっかりと登山者の顔を見て、「あなたは1回じゃだめだろう。来年も立山に来られてはいかがですか。来年は宿代を安くしますよ」とか言いながら勧誘すると、「ああ、俺はまだまだ罪深いから来年も来ようかな」という気になるわけですね。そうやって衆徒は稼いだわけです。

まあ、今の話は冗談ですけれども、ひとつ言えることは、いずれにしろ山の中を死者の世界として考えているということです。それは何でかということ、最初に申しましたように、もともとはご先祖様の魂との関係があるわけですね。だから、先ほどの話のように、死者の世界を生前学習して、すっきりさせて生まれ清まって戻ってくるのが、立山もそうですけれども、日本の山岳信仰の根底にある思想です。なぜ日本人は昔から山に登るかということ、外国人ではマロリーが「そこにエベレストがあるから登った」と言いましたが、日本人というのはそうじゃなくて、山の中で、山の不思議な力で生命・人格が再生するものと考えて山に登りました。特に修験道にはそういった思想があります。今はリフレッシュで登りますけれども、案外、似たような部分もあるように思います。

それでは、このあと布橋灌頂会の行事の具体的な儀式内容についてお話ししていきます。それはどんな行事かといいますと、毎年秋の彼岸の中日に、全国から布橋灌頂会に参加したいという女性たちがやってきます。最初に芦峯寺の閻魔様を祀った閻魔堂（えんまどう）で懺悔の儀式を行って、「私はこんな悪いことをしました」というようなことをやります。閻魔様に「ごめんなさいね」と。それが終わると女性の参加者たちは、芦峯寺の宿坊の衆徒たち、いわゆるお坊さんたちに導かれて布橋を渡ります。布橋を渡ると、あの世の側に姥堂（うばどう）というお堂があって、その姥堂の中でお籠もりをして、いろいろなお経などを読んでもらって、それでこの姥堂の中で仮に死んだことにして、さらに女性は姥堂を出るとき、生まれ清まって出るといった儀式です。男性が立山で禅定登山を行うことと、この布橋灌頂会は同意義の儀式だということになっているわけです。これは大変珍しい行事ですし、参加した女性たちはみんな極楽浄土に行くことができるというものですから、全国各地から女性の人たちがやって来たと伝えられています。

この布橋灌頂会の信仰というものに非常に深くかかわっているのが、この下を流れる姥谷川です。それから、パワーポイントの画像を見ていただくと、ここに描かれているのは奪衣婆（だつえば）とか、姥尊（うばそん）というものなのですが、これらについて、立山曼荼羅をご理解いただくために少しお話をしていきたいと思います。また、せっかくの機会ですから、布橋灌頂会のイベントの写真も少し見ておきたい思います。

これが芦峯寺の布橋です。この世とあの世の境界です。私は、あの世でもこの世でもない場所から、写真をあの世に向かって撮っているわけですね。この布橋を渡り切ってしまったら死者の世界です。たまたまこの日は、立山の山が正面に見えて、何となく「極楽浄土に行けるのかな」というような雰囲気だったんです。

パワーポイントの現地写真でロケーションを説明しますと、ここに常願寺川がこう走っていて、その常願寺川に向かって姥谷川がこう流れているところに布橋がかかっています。昔はこの布橋を渡らないと山に入って行けませんでした。向こうが立山の方で、こちら側はこの世の世界、いずれも芦峯寺の村内です。あの世の世界に芦峯寺の墓地があります。なぜかと言えば、まさにそこはあの世だからです。これが芦峯寺村の人々の考え方、思想ですから、村人にとっては布橋の向こうに墓地を設けたわけです。こちら側は死者の世界ですから。逆にこの世の側のこちら側には墓地は設けませんでした。

パワーポイントの写真を見てください。立山曼荼羅の布橋灌頂会の場面の写真を少し拡大してみると、閻魔堂で懺悔をした女性の参詣者たちが、芦峯寺の衆徒たちに導かれて、この世とあの世の境界の布橋を渡って姥堂を目指して行きます。さて、会場の皆さんの中にはおられないと思いますけれど、日頃から嘘をついてばかりいたり悪いことばかりしている女性は、布橋を渡って行くと、残念ながら橋の途中で、この橋が突然クモの糸のように細く見えて、「あれ、あれ、あれ」って渡れなくなります。そのうちに「わあっ」といって布橋から姥谷川に転落してしまいます。そうすると、姥谷川には大蛇が待ち受けていて、あるいは龍が待ち受けていて、布橋から落ちてきた悪い女性をパクンと食べてしまうのです。会場の女性の皆さんは大丈夫だと思いますが、これが布橋の下の大蛇の伝説です。

一方、善良な女性の人たちは無事布橋を渡って姥堂の中に入ります。そうしますと、パワーポイントの立山曼荼羅の写真を見てください。姥堂の中には何だか得体の知れない老婆の姿をした尊体が祀られています。現在、姥堂はありません。姥堂は残念ながら明治初年の廃仏毀釈で壊されて、今はないんですね。姥堂には、「姥尊」（おんば様）と称されるこのような怖い顔をした、何だかよくわからないような老婆の姿をした尊体が、69体ぎゅうぎゅう詰めで安置されていました。この姥尊は芦峯寺村の一番大事なものです。なぜかといいますと、これは芦峯寺の村人たちの山の神なんですね。姥尊はいずれも、非常に怖い顔をしています。これが何かというと、実はその形は、山の神であったり三途の川の奪衣婆だったりするわけです。これは南北朝時代の姥尊で、地元では「おんば様」といいます。あと、例えば、今、パワーポイントの写真に写っている数体の姥尊は江戸時代のものです。よく見ていただきますと、江戸時代の頃の姥尊（おんば様）と南北朝時代の頃の姥尊（おんば様）の容貌が少し異なっていることがわかります。

それには次のような理由がありました。江戸時代ある宿坊家が毎年の輪番制で、その年は当番を務めていました。明和5年（1768）のある日、その宿坊家の衆徒が姥堂で御勤めをし

ていた際に、姥堂内で蠟燭が倒れて火災が発生し、姥堂は全焼してしまいました。まさにその時、「これは大変だ」といって、衆徒は慌てて火がついて燃えている3体の姥尊像を堂外に退避させたようです。実は先ほどお話ししたように、姥尊は全部で69体安置されていたか、そのうちの3体が本尊であり、そこで火災の際、衆徒は大変な責任を感じるとともに、火の回りが速くて、とても全ての姥尊は持ち出せないと考えて、火のついた本尊3体だけを必死の思いで姥堂の外に持ち出したようです。ですから、本尊の3体の姥尊には生々しい焼け焦げの跡が見られます。

姥堂というのは加賀藩の御普請所（ごふしんしょ）であり、藩が建設費用や修繕費用を負担してくれる、今の時代でいえば国立施設のようなお堂ですから、藩はすぐに姥堂を再建してくれました。ですから、姥堂というのはそんなに大きなお堂ではありませんでしたが、それでも大変立派なお堂でした。なお、例えば高岡の瑞龍寺や城端（じょうはな）の善徳寺、井波の瑞泉寺などは、いずれも加賀藩の御用大工・山上善右衛門（やまがみぜんえもん）の建築なんですけれども、実は姥堂もこれらと同様に山上善右衛門の建築でした。姥堂は残念ながら廃仏毀釈で壊されましたが、もし残っていれば芦峯寺に国宝の瑞龍寺があるようなものです。

さて、加賀藩は姥堂の建物についてはすぐに再建してくれましたが、堂内に安置されていた姥尊まではつくってくれませんでした。「そんなものは自分たちでつくりなさい。何だかよくわからない怪しげな尊像だし」と言われます。そこで、芦峯寺の衆徒たちはかつての姥堂のように、焼け残った本尊以外の66体の姥尊を新たに揃えるため、まずは勸進活動を行い財源を調べ、さらに数が数だけに、製作については各所に発注したものと思われます。したがって、発注先ではいざ仏師が姥尊をつくろうとすると、どんな容顔でつくればいいのかかわからないわけです。ある仏師は姥尊を三途の川の奪衣婆のようなものだと思ってつくり、ある仏師は姥尊が男なのか女なのかもわからず、男性の姿でつくり、いつの間にか、姥尊にもおっぱいがあったりなかったり、いやはや、69体を通して見たならば、千差万別といった有様でした。

姥尊の容顔の大体の傾向としては、江戸時代天明5年（1785）の姥堂の火災以降のものはもっぱら奪衣婆の形をとるものが多く、一方、火災で焼け残った姥尊は3体とも南北朝時代の頃のものですが、両者は明らかに異なった像容・雰囲気を持っています。その辺は微妙なところなのですが。

その背景には、姥尊の起源が実は大日岳（だいにちだけ）の山の神様であろうということ

があります。ここからは宗教民俗学の研究分野の話になりますが、パワーポイントの絵図を見てください。この絵図は江戸時代後期の芦峯寺の村落や持山などの情報を示したものです。この部分が芦峯寺の集落ですが、少しわかりづらいかもしれませんが、ここに布橋があって、閻魔堂があって、姥堂があります。布橋はこの世とあの世の境界です。これは常願寺川です。向こうが富山方面、これが立山方面です。常願寺川に向かって、この川は姥谷川（うばだにがわ）、あるいは姥堂川（うばどうがわ）ともいいます。

さて、芦峯寺の人々は、いったいどこから生活水を供給しているかということ、常願寺川の水を汲んできて使っているわけではありません。先ほど姥尊の起源は大日岳の山の神だとお話ししましたが、その大日岳は山塊として芦峯寺まで繋がっています。大日岳の山並みが芦峯寺まで延びてきているのです。芦峯寺の裏山は大日岳の一部なわけです。その山中で芦峯寺の人々は狩りや焼き畑農業をしてきました。また、生活水については、その山々に降り注いだ雨が山麓のところから伏流水みたいになって出てきているのを利用していました。ですから、立山、立山とはいうものの、芦峯寺の人々と直接的に関係が深かったのは、水の供給といったことでは立山連峰の中の大日岳でした。

芦峯寺の裏山の来拝山（らいはいざん）の山腹に「蛇（じゃ）ワミ」という地名の場所があります。そこは湿地で日頃は全く水がないのですが、雨期だとか何かの拍子に「さまよえる湖」で有名なタクラマカン砂漠の北東部にあるロプノール湖みたいに池になります。その蛇ワミを水源地にして、その辺りから姥谷川がじわじわ流れ出てきているわけです。芦峯寺の人々は、どうも、この辺の水が山腹の下の方で、ところどころから湧き水としてしみ出して来ているのを生活水として使っています。

このように、来拝山の山腹にこういった場所があるわけですが、おそらく蛇ワミは、雨や雪の水を貯える自然の水棚になっていて、そこから地下にしみ込んだ水が、芦峯寺村のあたりで伏流水になって湧き出ているものを使っているわけです。だからこそ、蛇ワミなんですね。

ここでいう蛇ワミの「蛇（へび）」というのは、皆さんご存じのように水の神様なんです。蛇ワミの場所を、もう一度パワーポイントで先ほどの芦峯寺の古絵図で見ますと、この赤く塗ってあるところが蛇ワミなんですね。蛇ワミのところで水が貯まって、その水が一度地下にしみ込んで、さらに、その水がこの辺から湧き出て、次第に川になって行って、姥谷川となるわけです。

さて、このような現地の環境から考えますと、姥尊というのは、これはちょっと難しいん

ですけれど、最初に言いましたように山の神は水を供給してくれる神でもあるんです。だから、大日岳の山の神である姥尊は、一方では山の神として熊や鹿や様々な山の幸を恵んでくれますが、また一方では、山の神は水の神でもあり、水も供給してくれる存在なんですね。

パワーポイントで立山曼荼羅の写真を見ていただきたいのですが、少し見えにくいですが、昔ここに影向石（ようごうせき）という石があったんです。江戸時代まではあったんですが、いつ頃からなくなってしまう今に至っています。姥谷川が蛇ワミというところから、このように芦峯寺の集落まで流れてきて、常願寺川と合流するわけですが、立山曼荼羅には姥谷川の下流に位置する姥堂の脇に柵の囲いが描かれています。この立山曼荼羅では柵の囲いだけしか描かれておらず、その囲いの中に影向石の姿は見られませんが、立山曼荼羅の種類によっては、この柵の囲いの中に影向石が描かれているものもあります。影向石というのは、いわゆる神様を迎えるためのもの、要するに神様の降臨装置です。神様がどこに降り立つかといった際の着陸場所です。では芦峯寺のこの影向石はいったい、立山のどの神様を着陸させるための石かということ、やはりこれは大日岳の山の神様なんですね。

一方、立山大権現の神様を着陸させる装置は石ではなかったのですが、それは芦峯寺集落のどこに設けられたかといいますと、布橋の向こうにある雄山神社（おやまじんじゃ）の境内地だったんですね。だから、立山大権現は姥堂のほうじゃなくて、布橋を挟んで反対側の雄山神社に降臨したわけです。会場の皆さんには現地の地理感覚がないと思いますので、説明するのがとても難しいのですが。

パワーポイントの絵地図で説明しましょう。少し見えづらいかもしれませんが、これが布橋です。これが姥堂です。これが閻魔堂です。これが芦峯寺の雄山神社です。皆さんがよくお正月の初詣で参拝される雄山神社です。現在は富山県〔立山博物館〕の展示館がその横にあります。

さて絵地図で見ていくと、布橋を挟んで、ここまではこの世の世界で、ここからはあの世の世界です。大日岳の神様の着陸装置は先ほどお話ししたとおり、ここに 있습니다。じゃあ、立山大権現はどこに着陸させるかということ、この場所であり雄山神社の境内地です。

芦峯寺の人々の本当の意味での神様は、実は立山大権現ではなさそうで、実は大日岳およびその山塊の山の神様であるといえそうなんですね。このことはすごく大事なことです。

すなわち、この布橋を渡った先の姥堂側の場所というのは、芦峯寺の人々にとっては雄山神社側の立山大権現の場所よりも、古くからの信仰の場所となっていて、姥堂側の方が大事なんです。もしかすると縄文時代から既にそういうような感覚があったかもしれせん。芦峯

寺集落の雄山神社側は、浄土教だとかの新しい仏教が流入してくると、こちら側で整理したのです。

したがって、芦峯寺集落は、山側の方からむしろ里側の方に向かって開発されていったと考えられます。山側のほうの信仰のほうが古い信仰で、里側の方の信仰が新しい信仰、そういう構造が見受けられます。その古い信仰というのは何か。芦峯寺の人にとって一番大事な、自分たちの根源とは何かというと、大日岳の山の神、イコール姥尊（おんば様）なんですね。そして芦峯寺では、三途の川の奪衣婆と習合しました。

山の神というのは、これまで日本の民俗学で指摘されてきましたが、女性であることが多いのです。山の神の特徴を言いますと、女性であることが多く、しかも大変醜くて男好きで、子たくさんです。だから、山の神に獲物を恵んでくれるよう求める際には、例えば、男性の猟師が入山するにあたって、女性と性交渉をして直ぐに入ったらだめで、しばらく精進潔斎（しょうじんけっさい）をしてから入山しなければなりません。山の神は自分より醜いものが大好きなので、オコゼという不格好な魚を持って行って捧げると非常に喜びます。

猟師が入山してどうしても熊や鹿などの動物が出てこない場合には、若い猟師が素っ裸になって、あそこを振り回しながら「わあー、どうだ」と言うと、山の神は「わあー、いい、いい。もっとやれ」と言って喜んで、次の日からたくさんの動物が出てきます。

山の神には、こうしたどこか妖怪めいた特徴がたくさんあるわけです。芦峯寺ではこの山の神と、同じく妖怪的な三途の川の奪衣婆といったとんでもないものが習合しました。

パワーポイントの立山曼荼羅の写真を見てください。三途の川というのはこの世とあの世の境界に流れている川でして、『地藏菩薩発心因縁十王経（じぞうぼさつほっしんいんねんじゅうおうきょう）』という中国の偽経に、その川にまつわることが書いてあります。このお経によると、人間が死ぬとその人は亡者になって、まず死出の山に登っていきます。登るだけ登ると、次に三途の川に向かって降りていきます。そうすると、本当の意味での死者の世界というのは、三途の川が境界となっていて、その川を渡った先からです。会場の皆さんはおそらく善良な人ばかりですから、三途の川を渡るとき、橋渡（きょうと）といって橋がかかっているところを渡っていくと思うんです。なかにはちょっと悪い人もおられるでしょうから、その人は山水瀬（せんすいせ）といって膝ぐらいの深さの浅瀬を渡ります。そうすると、時折パシャンと川の水がかかたりします。皆さんの中にはおられないと思いますが、悪いことばかりしてきた人は江深瀬（こうじんせ）といって身長よりも深くて流れが速くて、たまに土石流のように岩が流れてくるところを泳いで渡ります。ここでは大概の人が溺

れます。しかし、もう既に死んでますからそれ以上死ぬことはありません。水を飲んで、げげーって言いながら対岸に流れ着くと、対岸には奪衣婆というお婆さんがいまして、流れてきた人、渡ってきた人、歩いてきた人の死に装束を剥ぐわけです。川の流れて死に装束が脱げて素っ裸になって流れ着いた人は、剥ぐ装束がありませんから、奪衣婆は生皮を剥ぎます。奪衣婆は奪った死に装束や生皮を衣領樹（えりょうじゅ）という木の枝のところにかけます。そうしますと、この衣領樹という木は秤になっていまして、悪い人ほどずぶ濡れで水をたくさん含んで重くなっていますから、あるいは生皮はそれ自体が重いですから、枝にそれをかけると、ぐうっと下がってその人の罪の重さが一目でわかるようになっています。

その後は、三途の川の向こうに10人裁判官が待ち受けていて、初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日の四十九日まで、それが終わると100日、1年、3年、の全部で10回の裁判が待っているのです。その事前審査を行っているのがこの奪衣婆というわけです。

三途の川で舟に乗って渡りたい人は六文銭を持っていけばいいとか、いろいろ言われていますけれど、実はこの三途の川の奪衣婆のお話も、10人の王様が裁判するというお話も、鎌倉時代頃に中国から日本に伝わったものです。ですから、今でも私たちは僧侶を迎えて回忌法要などを行います。四十九日法要だとか三回忌法要とか、ああいうのは全て鎌倉時代以降のことなんです。

それはともかくとして、この三途の川の奪衣婆と、先ほどの女性の醜い特徴を持った山の神様が芦峯寺では習合したものですから、芦峯寺衆徒が用いていた立山曼荼羅の画面には、奪衣婆は非常に象徴的な場所に描かれます。すなわち、姥尊を祀った姥堂の建物のすぐそばに描かれるのです。

芦峯寺の縁起の中でも、姥尊（おんば様）と、奪衣婆は一心同体として書かれています。奪衣婆というのは、ある意味非常に妖怪的なものです。人間の生皮までも剥いでしまうわけですから怖い存在です。三途の川の渡りきったところで死者を待ち受けて、その罪を事前に審査するといった、少し妖怪性の強い奪衣婆と、芦峯寺の山の神が、芦峯寺の村の中では習合しちゃっているんです。これに対して、例えば立山以外の他所の山の神や奪衣婆とかとは違って、芦峯寺では習合してしまっているのです。

奪衣婆というのは、考えようによっては水辺の神様なんです。中国からやってきた水辺の妖怪のような神様です。姥尊というのは大日岳の山の神がルーツですけれども、しかし、もう一方では、山の神である姥尊は水の神でもあるわけです。

こうしたことを示す事例を挙げますと、池のそばとかに、水があるところの地名に、よく「姥」という字が使われています姥が岳（うばがたけ）とか、姥が淵（うばがふち）とか、姥が池（うばがいけ）というふうに。姥というのは山の神でもあるけれども、実は水辺の近くにもいるわけです。だから、そういう地名がつくのです。姥が岳とか、姥が池とか、姥が淵とか。だから、日本の中にそういった風習があったからこそ、日本の山神と中国から流入してきた三途の川の奪衣婆も、芦峯寺の村の中で見事に習合し得たということです。

さて、布橋灌頂会の話に戻りますが、そういったことが実は布橋灌頂会とも大いに関係をしています。かなり難しい内容なので、ほんの少しだけお話しします。

布橋灌頂会の儀式では、女性の参詣者が閻魔堂の閻魔様の前で懺悔をして、そのあと、この世とあの世の境界の布橋を渡ります。その後姥堂に入ります。布橋灌頂会の日、姥堂というのは、その中に大日岳の山の神様である姥尊がたくさん入っておられる、いわばミニチュアの立山となっているわけです。ですから、布橋灌頂会の女性の参詣者たちは、実際に立山山中に入っていなくても、姥堂に入って儀式を受けることで男性のように、擬似的に立山禅定登山を行ったことになるわけです。男性が行う立山禅定登山の構造と同じく、女性は布橋を渡ってあの世に行き、姥堂で儀式を受けることによって、一度死んだことにして、生まれ清まってこの世に戻ってくるのです。

さて、芦峯寺での姥尊と奪衣婆の習合の話や、布橋灌頂会における姥尊について、いろいろお話ししてきましたが、パワーポイントの立山曼荼羅の画面を見ると、姥谷川に龍が描かれています。例えば、この龍の図像は、姥谷川が蛇ワミから流れ出てくることから、蛇ワミの神様イコール水の神様として、龍のかたちで、この場所に象徴的に表現されたものです。わかりますか。本来、姥谷川の水源地の蛇ワミに水の神様がいますが、しかし、立山曼荼羅では、姥堂のすぐ近くの姥谷川下流に象徴的に描かれているということです。姥尊も蛇ワミの水の神様も一心同体の大日岳の山の神として、ということです。このように立山曼荼羅の中では、水ということを通して、山の神と水の神の同体性を非常にシンボリックに表しているわけなんですね。

最後に簡単にもう一つの事例についてお話しします。

立山カルデラの中に「刈込池（かりこみいけ）」という池がありますけれども、その刈込池というのは、その池に龍神がすんでいるというふうに昔から思われていました。龍神というのは、水をくれる神様がそこにいるということなんですね。江戸時代、芦峯寺や岩峯寺の衆徒たちは、富山平野で日照りが続くと、加賀藩から命令を受けまして刈込池まで行って雨乞

いの儀式をやるんです。

要するに、富山平野で雨が降らなくて干ばつが続くと米ができないですから、それを宗教的に何とかしろということで刈込池まで行きまして、そこで眠っている龍神を起こすわけです。「水をくれ」と言ってやるわけです。そうしますと雨が降ります。

パワーポイントの立山曼荼羅の写真を見てください。これは「立山曼荼羅 坪井家本」という作品ですけど、ここに刈込池が描かれています。ちょっと見づらいと思いますが、よく見ると、そこにはこのように龍が描かれていますでしょう。このように江戸時代の人は、刈込池には龍がいて、その龍の仕業で常願寺川が洪水になったり、あるいは雨を降らせてくれたり、いろいろ水をくれたりということを考えていたんですね。だから、昔からそういうふうに思っているものですから、万が一日照りになると、加賀藩は芦峯寺や岩峯寺の衆徒たちに、「よし、おまえたちがそこまで行って、龍を起こしてきなさい」みたいな話で、「さあ、起きて。雨を降らせて」、あるいは「水をよこして」とかいう話になるわけです。

安政5年（1858）に越中では地震が起こって、その地震がもとで洪水が起こります。そのときに大きな石がごろごろ下流に流れ出ます。その時の大きな石は、今も転石としてところどころに残っていますが、それらの転石の中に、例えばこのように立山町西大森の転石があります。パワーポイントの写真をよく見てください。実はこの石の下にあるのが転石らしいんですけども、ここに水神の碑が建てられています。この水神はいったいどの水神なのでしょう。ただ単に水神ということでもなさそうだと。実は常願寺川というのは刈込池のカルデラのほうとつながっていますから、いわゆる龍神というものが、ある意味、下のところでも同じ水系として祀られるということは考えられるわけですね。

だから、今の人たちが考えますと、神や仏に自然災害が起こらないように頼んでもどうにもならないとは思いますが、昔の人たちは、もともとが死んだ人の魂が山の中で神になり、その神が水をくれる、食べ物を与える、洪水を起こす、日照りを起こすと考えていましたから、そういった長い間の自分たちの宗教習慣ですとか生活習慣の中で考えて、こうしたイメージを最終的には立山曼荼羅なんかにも残しているのだということは言えるでしょう。

私どもの仕事は、どちらかというと人文科学系に関するものですから、そういった絵画から「じゃあ、昔の人はどうだったか」ということを読み解いたりしているわけです。

ちょっと乱雑な話になりましたけれども、これで講演は終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

【質疑応答・意見交換】

○司会（林） 福江先生、どうもありがとうございました。

我々にとって常願寺川といいますか、立山というのは非常に身近なところなんですけれども、これだけのいろいろな考え方があって、死者の世界だったということで受けると、これから我々が日常的に遊びなり仕事なりで入ってきても、非常に緊張した面持ちで入っていかなければいけないんだというのを考えると思います。

それでは、15分ほど質疑応答の時間を取っております。立山だけでなくでもいいんですが、そういう山岳信仰のことなどについて、何かお聞きしたいことがあれば、この機会ですのでぜひお願いします。

どなたかおられますでしょうか。

それでは、天坂さんお願いします。

○天坂 天坂と申します。きょうはどうもありがとうございました。

富山の薬売りの関係と、立山曼荼羅の布教というんでしょうか、その関係があるということを知ったことがあるような気がするんですが、そののころをお願いします。

○福江 富山売薬というのは皆さんよくご存じだと思いますが、富山売薬の商売の仕方というのは、先用後利（せんようこうり）といいまして、先に薬を渡しておいて、毎年同じ時期に同じ家に来ますから、使わせておいて使った分だけの代金を徴収して薬を補充していくというやり方です。置き薬ですね。先に使わせて後で利益を得るという形の原点が、立山信仰の特に芦峯寺の宿坊の衆徒たちの布教活動にあるという論があるんです。

それはどういうことかと言いますと、芦峯寺の宿坊の衆徒たちは、冬の間は地元においても宗教活動がほとんどできませんので、思い切って太平洋側に出る人が多いんですね。お札だとか、先ほどの奪衣婆に皮を剥がされないための経帷子（きょうかたびら）、いわゆる死に装束だとか、いろんなグッズを宅急便で送ります。宅急便というのは当時の宿駅を使った伝馬の制度で、例えば尾張の村に行こうとすると、尾張の村の最初に尾張に入って何う百姓の庄屋さんの家に、全部荷物は事前に自分より先に送り届けてあるわけです。自分は道中、立山曼荼羅を携えて、絵解き布教をしながら信者のいる檀那場に向かうわけです。

そうすると、1日目の最初に入る庄屋さんの家に行って、「荷物は届いていますか」、「全部届いています」、「じゃあ、あなたの村に必要な枚数のお札だけここから抜いてください」、

「わかりました。100軒あるから100軒分抜きます」、「じゃあ」と言ってマージンで幾つかお土産なりお金を渡す。あとは全部庄屋さんに任せる。で、置いてくるわけですね。そうすると、次の村にまた荷物を送っておいてもらって、次の村でまた庄屋さんに開けてもらって済む。簡単に言うと自分より先に荷物が届く。

問題は、そこでの利益はいつ得るかという、そのときには得られません。もう自分は次々庄屋さんと話をして、荷物は自分より先に絶えず行って、お金は、ですから翌年同じようにやってきたときに、「去年の売り上げがどうだった、いや、これだけお札が出たよ。じゃあ、その代金だけちょうだいね」という、いわば先用後利なんですね。だから、その先用後利のやり方が売薬さんに取り入れられたんじゃないかというのが、古くからあったわけです。

しかし、それがまことしやかにずっと言われていたんですが、富山売薬と立山信仰の関係を直接知る資料というのは、まだ1点も出ていません。『富山史壇』の第1号か2号でそのことが提起されて、富山大学におられた坂井誠一先生が、八尾（はつお）の修験売薬で例を出されたんですが、しかし、その資料も今はどこにあるのかわからないのです。

ですから、修験売薬にしても、あるいは立山信仰の売薬の配達にしても、実際に富山売薬との関連性を示すものはないということが一つと、もう一つは、氷見（ひみ）の鏡磨きの出稼ぎの人たちにも先用後利があるわけです。そう考えますと、今問題になっているのは、そういう先用後利というのは立山信仰の専売特許だったわけではなくて、その当時、結構あちらこちらで方法としてもあったので、同時多発に富山売薬は富山売薬の中で先用後利を考え出して、立山信仰は立山信仰で出してということで、お互いの連関関係とかはなかったんじゃないか。その時代の一つのやり方だったとして考えると、直接には関係はないんじゃないかという説のほうが、今有力になっています。

一応そういうことと立山信仰と、富山売薬さんのいわゆる営業形態が立山信仰のルーツじゃないかなということに対して、そういうことのあると。むしろそれは今ちょっと否定的な意見のほうが強いと思います。

○天坂 ありがとうございます。

○司会 どうもありがとうございます。

そのほか何かございますでしょうか。

それではお願いします。

○問 富山の針原（はりわら）に新川（にいかわ）神社というのがありまして、先生のきょ

うの常願寺川水系の水神信仰と何か関係があるのかなと思っているんですけど、新川神社は実は常願寺川の上流から流れてきたという伝承があるんですね。先生の演題と何か関係があるのでしょうか。

○福江 実は、長い間立山信仰の研究の中で、きょうちょっとお話ししましたがけれども、おんば様というのが立山信仰の江戸時代の一つの中核であった芦嶽寺の村の根本的な尊体ですけど、おんば様の正体が何かというのが、昔から立山信仰研究の先達の中で大変問題になったわけです。そのときに木倉豊信さん、富山県の歴史界の中では大変な重鎮ですけども、木倉先生は論の一つとしては、新川姫神社の神様が姥尊じゃないかという論を実は出しておられます。

例えば、先ほどの影向石、神を下ろすための石というのが、姥堂の脇に囲み柵しか描かれていませんでしたけど、明治まではどうもあったんですね。あの石がどこに行ったかという、新川姫神社に行ったという説もあるんですね。そう考えますと、やはりおんば様の正体についてや、姥堂の横にあったそういった石、すなわち影向石が、例えば新川姫神社に本当に行っているかどうか分かりませんが、そういったことがあるとすると、もしかしたら姥尊の正体としては、新川姫神社の神様との関係は、今後も考えないといけないと思っています。

ただ、例えば廣瀬誠先生は、そういう論でもなくて、いわゆる日本の記紀の神話の神様がそのまま表徴されたという説もありますし、私なんかはどちらかというと、いろんな生活空間だとか、いわゆる水の問題だとか、いろんな信仰、いろんな宗教の日本に伝播したこととかの組み合わせとかで考えると、山の神かなというふうには考えます。そこら辺は諸説ありますね。だから、新川姫神社の神様も姥尊じゃないかという説もあります。

○司会 よろしいでしょうか。

では、前川さん。

○前川 前川と申します。

江戸時代には、実は引っ越ししたりしているんですよ、今の富山市から立山町のところへとか。そのとき、お城もあるわけですよ。芦嶽のところで中心的な場がつけられて、同じ江戸時代なのに、どういう人たちが芦嶽にいたのか、何か非常に興味がわいたんですけども。

○福江 江戸時代の芦嶽寺にいた人たちということですか。

○前川 人とのかかわりについて、富山に城があって、よく水害を受けて引っ越しさせられ

たり現実的な動きもしているんですね。その中でこういう曼荼羅が、私もどっちかというとな無宗教な人間なんですけれども、その辺の人間性のつき合いとか、違いとか、何かあったんでしょうか。

○福江 例えば、それぞれの質問に対して1時間以上講演したくなるようないい質問ばかりなんですね。それを2～3分で答えるのは大変難しいんですけども。

今、考えると芦峯寺は結構な山の中にありますよね。しかし、江戸時代の芦峯寺というのは、おそらく越中の村の中でも、ある意味で最先端、ある意味で田舎。と言いますのは、江戸時代に芦峯寺の村は米ができないんです。焼畑なんです。だから、縄文時代から焼畑文化、要するに水も山からのわき水、山では焼畑をつくる。米はつくれないから買うしかないんですね。

しかし、当然焼畑をする百姓がおりまして、そうかと思うと宿坊経営者のいわゆる宗教者の僧侶たちもいる。冬の間は、実は宿坊経営者の男の人たちは15歳を超えますと芦峯寺にはいません。みんなそれぞれ檀那場（だんなば）といって自分たちが、いわゆる檀家さんをある程度集中させて抱えている村や町を縄張りとして持っています。例えば、芦峯寺の日光坊なら尾張国のこの町、この町、この町といった具合です。

例えば、芦峯寺の宝泉坊（ほうせんぼう）なら、江戸城の大奥との関係ですとか、吉原ですとか、そこまで入っているんです。大奥の篤姫だとか、いわゆる和宮との関係の文書が山ほど出てきています。ですから、皆さん全く芦峯寺というものを勘違いしていて、芦峯寺の宿坊家のうち、例えばひと冬で一番儲けた宝泉坊という宿坊家は、それこそ本当に吉原だとか大奥とかを相手にして、ひと冬で740両儲けています。ものすごい収入です。

けども、失敗すると元手がかかる布教ですから、路銀で大体——路銀というのは旅費ですけれど、大体60万円ぐらいかかります。1ヵ月とか2ヵ月そこに滞在しますからね。それだけの売り上げが十分稼げるところは巨大経営になりますし、1回失敗しますと赤字になる。だから、そういった人が芦峯寺の村には、いわゆる百姓たちとともに、荒稼ぎする人から、いっぺんに貧乏になる人までいて、貧富の差がものすごかったわけです。

逆に言うと、江戸に行った宿坊家は、布教対象は江戸の人たちで、いわゆる商人たちも相手にしますし、僧侶も相手にしますし、大名家にも入ります。大名は大名でも、幕閣大名の家に入るものさえ出てきます。そうすると、TPOをわきまえないといけない。そんな汚い格好で行ったらだめですから、ちゃんと正装して、そういった大名家にお札を配るという、袴（かみしも）を着てちゃんと献上の三宝を持ってうやうやしく行くわけです。

ですから、それぐらいの文化レベルというのは当時の江戸時代の芦峯寺にあるわけなんです。とてもじゃないが、山の人たちではない。当然お能の鑑賞もします。吉原からは大量にお金を集めています。なんでかと言うと、吉原をマーケティングで考えると、女性たちの苦患の場所で、いわゆる身売りされてきて、そこで病気になって死んでいく人たちで、しかし出れないわけですね。小金は持っている。自分の人生が苦しいから救済を望む。そんなところで女人救済を説く立山信仰というのは、もってこいです。布橋灌頂会に來れないなら、そのときのお札をあなたたちにあげます。これは女性が救われる札です。立山は女人往生の霊場（れいじょう）だから、血盆経（けちぼんきょう）をあげます。

そうしますと、女性は逃げて行けないところで、しかも寿命が短くて新陳代謝がすごい激しいところに立山信仰が入っていくと、儲かってしょうがない。そういったところにはお金持ちの殿様だとか、あるいはそういう人も忍んでくるから、文化情報が入る。そこからどんどん拡散していく。そういったことまで考えている人たちですから、それが芦峯寺の村なんです。

だから、焼畑をされていて米がつかれないというようなところを持ちながら、都会生活に非常になじんでいて、よく世の中のことも知っている。みんな信州に行ってた人も、大坂に行ってた人も、江戸に行ってた人も、春になると戻ってきて寄合をして、「あそこの地域はこうだ。あの老中はだめだ。この人はこうだ」といろんな情報も入るから、一大情報網になっている。そういう村です。だから、あんまり越中のほかの村と比べても、全然おもしろみも何もないというか……。

○司会 ありがとうございます。

ここはすごく発達した場所だったということがよく分かったと思います。

そのほか何かありますか。

○高木 安政5年に起こった大地震は、お水と関係があるのかどうか知りませんが、震度何だったんでしょうかね。ちょっとそこを聞いたかったもので、お願いします。

○福江 すみません。私は最初に申しましたように、地震の研究者ですとか地質の研究者じゃないものですから、自然科学のそちらのほうというのは実は全然知らないんです。ご存じでしたら、菊川先生ぜひ。すみません、全く知らないもんですから。

○菊川 6とか7とかって言われてますよね。

○福江 震度6とか7とかのレベルだそうです。具体的には私はちょっとわかりません。

○高木 ありがとうございます。

○司会 もう1つ2つぐらいは大丈夫なんですけれども、いかがでしょうか。

お願いします。

○酒井 酒井と申します。きょうは、ありがとうございました。

これだけの山岳信仰と龍神というか、川の信仰と、今先生がお話しされたように、そのエンターテイメントというか、すごくおもしろい場所の信仰なんですけれども、これだけの規模とこれだけの人気を誇ったところというのは、日本全国を見て、北陸でもいいんですけれども、ほかに例はございますか。

○福江 どういう学問から考えるかにもよりますけれども、おそらく日本にはあまり比較するところがないです。例えば、世界遺産になった奈良とか和歌山の歴史の山の道みたいな修験道的なものではあるかもしれませんが、立山は独自で、かなり宗教民俗的なこういうものがまとまってあって、なおかつ立山曼荼羅の絵に表徴されていて、非常にわかりやすい。

ですから、私が立山博物館におりましたときには、例えば筑波大学ですとか、天理大学ですとか、そういったところの先生方が、特に大学院レベルでフィールドワークをよくやりに来られました。というのは、芦峯寺で例えば一週間なら一週間でも勉強していくと、かなりのこういった部分が見えるという調査フィールドとしては非常に良質な場所ですし、あともう一つ利点があるとすると、これは川にもかかわりがありますけれども、海の近くの河口の付近には文化は山ほど入ってきますけれども、そこは新しいものが来てどんどん流されて、古いものが見えなくなります。

しかし、文化というのは海から入ってきて川を伝って山に入ってきます。そうすると、谷間のところでたまるんです。貝塚というのはあまりきれいじゃないですけれども、貝塚のようにたまるんです。芦峯寺というのは平安時代からの古い文化から、その後ずっと日本人がどういうふうな仏教をどの段階で、例えば三途の川の奪衣婆というのは、だいたい鎌倉時代と南北朝時代に、新しい地獄の思想とともに日本にやって来ました。

その前には、先ほど言いましたようにおんば様という山の神の信仰がある。その後に浄土教というふうな、ちょうど日本人がどのようなプロセスで仏教思想なりいろんなものを日本人がもらったのかというのが、芦峯寺の村にはきれいに地層のように積み上がっていて、それをきれいに復元できるんですね、あその場所は。

そう考えると、そんなところは日本には恐らくどこにも残っていません。だから、その当時は気づいていたか気づいていないかわかりませんが、そこにやっぱり立山博物館が

立地している意味もあると思いますし、手前味噌ですけれども、私自身が、先ほどちょっとご紹介いただいた日本学術振興会賞をいただいたときの評価、実はそういうことにもあったわけなんですね。

余談ですけれども、日本学術振興会賞の同期の受賞者に iPS 細胞の山中伸弥先生と一緒にいられて、同時受賞だったんです。ただし、その当時は、山中先生はまさかそんなノーベル賞をとられる方だとは全く知りませんでした。秋篠宮同妃両殿下がご臨席でパーティーがあったときには、たまたま私は山中先生の隣だったんです。そのときには、まさかそんな偉くなられる方とは知りませんでした。比較するのはちょっとおこがましいんですけど、その段階では iPS 細胞の研究と立山信仰のこの辺の研究はいい勝負だったということだけはお知りいただければと思います。いや、本当の話なんです。

○司会 どうもありがとうございます。

確かに、富山と同じように火山地域というのは日本全国にあると思うんですね。ただ、その中でこの立山は、これだけ曼荼羅を示せられるような発達をしたというのは、非常に興味深いところかなと思います。

皆さん、これから立山、常願寺川に行かれるときは、きょう学習されたことを胸に、楽しんでいただければなと思います。

それでは、最後に閉会の挨拶といたしまして、“とやま”川の会代表世話人の前川さんからお願いいたします。

○前川 福江先生、どうもありがとうございました。皆さんありがとうございました。

私、先ほどの“とやま”川の会の総会で世話人代表になったばかりでございます。68歳の頭が久しぶりに動きまして、非常に刺激になりました。

本当に富山県は、紹介でもありましたが、文献とかそれも川がかかわっていると。先ほどの総会での高田雪太郎さんの話も、それはつい3日ほど前のような話になってしまいました。このような曼荼羅の世界とかが常願寺川水系にあるということは、富山県としても、これからもいろんな幅の広い話題の中で話していけたらいいなと思っています。

私も立山カルデラ博物館の解説員になっておりまして、何かこの話を聞いて解説の中へ入れようかと思いましたが、全く頭が整理されなくて、入れることがまだできません。これからも、ぜひこのような川の文化の話を通じて、機会があれば皆さんと一緒に聞いていきたいと思っています。

きょうは「河川文化を語る会」を富山で開催していただきまして、ありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。

福江先生、どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 皆さんお忙しいところ、きょうはどうもありがとうございました。これで「第189回河川文化を語る会」を終わらせていただきます。

きょうは本当にどうもありがとうございました。(拍手)



河川
基金

当講演会は、公益財団法人 河川財団による
河川基金の助成を受けています。

当講演録の全部あるいは一部を無断で転載することはお断りいたします。

公益社団法人 日本河川協会